

熊野の  
ホコから

# 怪野の熊

「覚(さとり)とコダマ」  
其の九



和歌山大学  
システム工学部  
環境システム学科  
中島敦教授



山中に出て人の心を読んで恐ろしく、隙(すき)をみて喰らったという覚(さとり)。無知のくせに知識人のように振る舞っては人を恐ろしく、近年の大学研究者に多いタイプの扇動者の姿が目につく。イラストはB.O.B.O.

熊野の深山には人のような、猿のような姿をした「覚(さとり)」という妖怪がいるという。一方ではその姿はハッキリしないと。人の心を読むのが得意で、人が思ったことを先に言っている。隙をみて人を取って喰らう。覚は、コダマや、以前も紹介したダールとの関わりがあるようだ。山で遭難死した人を供養しないと、大人はダールに、子どもは

コダマに化ける。コダマが姿を見せることは希(まれ)で、風もないのに木々を揺らしたり、葉を落としたりする。山に迷ったりした時に「おい」と助けを呼ぶと、その人に



棲もった熊野の山中には遭難者の亡者も精霊も都合(す)んでいる。山の神もおみえになる。人間の都合だけで勝手に使っている。良いはずがない。その中で、覚(さとり)は森林保護の役割を担っていた。

取り憑(つ)いて「おい」と返す。ヤマビコとも似ている。憑かれた人が善人の場合には、助けを求める声を里にまで届け、遭難者の存在を教える。悪人に對しては、憑かれた人が男なら少年の、女ならば少女の姿となって現れ、覚となって人の心を読んでは恐ろしく喰らう。コダマは遭難者の亡者ではなく、年を経た木の精だともいう。

これは熊野の話ではないが、ある時、不届き者の木こりが、神域に入って木を切ろうとしていた。そこに覚が現れ、その異形の姿に恐れ驚くと、「お前、今、怖(こわ)いと思ったな」とニヤニヤしながらしゃべり出す。これは、困ったことだ、逃げようかと思うと、「今、逃げようかどうしようか迷ったな」と言う。これはと

ても逃げられない、このまま作業を続けよう。もしも襲われそうになったら戦おうと思うと、「今、開き直ったな」と言う。仕方が無いので、斧(おの)で切り続けていると、覚はジワジワ近づいてくる。今にも襲いかかるうとしたその時、振り下ろされた斧がバチンと木くずをはじき飛ばし、覚の大きなギョロ目に当たった。「ギャー!」恐ろしい声とともに覚はどこかにいなくなっていた。木こりの方もさすがに恐ろしく、木を切るのを諦めて逃げ帰ったという。人の心を読むのが得意の覚も、不測のことまでは読めなかったようだ。覚の話からは、無知のくせに知識人のように振る舞う、例えば近年の大学研究者に多いタイプの扇動者の姿が連想され、反省を促しているかのような。巨木が切られずに済んだことからは、森林保護に役立っていたことが分かる。

中島敦司(なかしま・あつし)教授プロフィール  
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

